

“すばらしきみえ”

FOR NICE COMMUNICATION

2020.6

216号

■特集／三重の洞窟めぐり

●いま、グループネット／かめやま万葉の森 ●みえを歩こう／津市美里町 北長野界隈



三重の洞窟めぐり

私たちが日々の暮らしを営む三重県内の山中や海岸沿いなどでは、岩石中に生じた空洞、すなわち洞窟が見られることがあります。これらの多くは、単に景観が珍しいだけでなく、地質学的にも生物学的にも貴重で重要な存在だといえるでしょう。中には、地域の伝承が語り継がれるものもあり、歴史・文化の面でも、その価値は高いといえます。

今回は、三重県内の洞窟をご紹介します。そつと耳を傾ければ、大地に刻まれた悠久の歴史物語が聞こえてくるかもしれません。

*三重県内の洞窟を見学する際には、各場所に対応した装備を準備し、洞窟内や周辺での飲食はしない、生息する生物などに触れない、持ち帰らないなどのマナーを守るようにしましょう。また、危険な場所には決して立ち入らないようにしてください。

*洞窟に関連したイベントや見学受けなどの開催日時・場所・受入れ方法・人数・料金などは、それぞれに異なり、変更する場合もあります。必ず、事前にご確認ください。

取材・文…中村真由美

中村元美

撮影……梅川紀彦

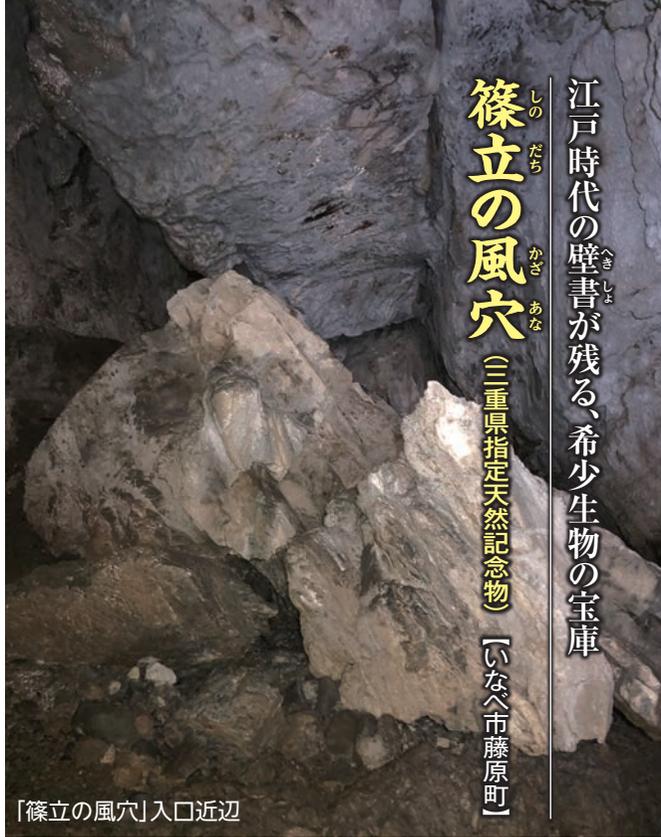
尾之内孝昭

ただし※印の写真は取材先から提供していただきました

取材・撮影は2月～3月上旬に行いました

篠立の風穴

（三重県指定天然記念物）【いなべ市藤原町】



「篠立の風穴」入口近辺

鈴鹿山脈の北部に位置する三国岳の麓には、「篠立の風穴」と呼ばれる洞穴があります。風穴とは『広辞苑』によれば「風の吹き起る穴」という意味で、「山腹などの奥深い穴」のことをいいます。このあたり一帯は、砂岩・粘板岩などに加えて石灰岩層が広く分布しています。その石灰岩層中にできた横穴が長い間に侵食され、およそ50万年前に形成され

たと考えられています。
「地質学的に貴重なのはもちろんですが、シノダチメクラチビゴミムシ・イセカマドウマ・イチハシヤスデなどが生息し、生物学的にも非常に貴重です」と教

えてくれるのは、いなべ市教育委員会生涯学習課の職員の二人。説明通り、上記3種は『三重県レッドデータブック2015』で「篠立の風穴」にのみ生息する固有種として紹介され、準絶滅危惧種に分類されています。そのほかにも多くの希少生物が確認され、特殊な生態系を構成していることから、昭和52（1977）年に県の天然記念物に指定されま

した。

「この風穴をふるさとの文化財として次世代へ引き継ぐため、できる限り自然のままの状態を保護しています」との言葉通り、普段は非公開で、入口扉には鍵が掛けられています。この日は入口近辺だけ見ることができました。崖に設置された梯子を登ると、想像以上に大きな入口が出現。その広さは、高さ約6メートル、幅は約5メートルあります。内部は漆黒の闇ですが、ライトを当てると大きな岩が見えました。説明では、この岩の横を進むと、約180メートルまでは調査が可能とのこと。また、内部は一部2層構造になっていて、途中から枝洞が伸びているとのことでした。

「この風穴は、昭和と平成の時代に詳細な調査を実施しましたが、実は江戸時代にも調査したことがあります」と教えてくれるのは、風穴のある立田地区で、地域の活性化・魅力発信などに取り組む、高橋賢次さんです。お話によると、明

治22（1889）年に成立した『伊勢名勝志』に、寛永13（1636）年に桑名城主の松平定綱が、家臣に調査を命じたことが記されているのです。それによると内部は「蝙蝠甚多ク」、灯火も消えてしまったことなどが綴られています。

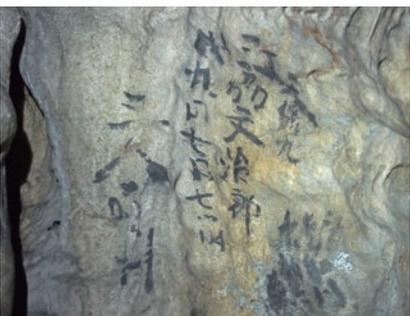
さらに高橋さんから、興味深い話を聞くことができました。実は、伊能忠敬（1745～1818）がこの地を訪れた際、内部に入った可能性があるのです。伊能忠敬といえは、江戸時代に日本全国を実地測量し、正確な日本地



「篠立の風穴」入口



イセカマドウマ※



江戸時代の元号“天保九”などの文字が読み取れる壁書※
撮影者：「地底旅団ROVER元老院」千葉 伸幸氏



「遊学祭」での風穴見学の様子※

図を作製した人物。その測量日誌をひも解くと、文化11（1814）年3月の記事に「中モ広カラズ：」などと、内部の様子が記されているのです。
「専門家によこれらの痕跡が残されていないか依頼したところ、36か所に壁書を確認することができました。ただ、寛永13年と文化11年がなかったのが残念ですが：」と高橋さん。十分な装備もない時代の人々が、何度も調査していることを考えると、その価値の大きさを改めて認識します。

さらに高橋さんは「この風穴の意義を

次の世代に理解してもらうためにも、内部を知るのにも必要だと考えています」と話します。そのため、毎年5月のゴールデンウィーク中に開催予定の「遊学祭」で、小学生以上を対象に風穴見学を受付けています。マスク・ヘルメット・ライト（懐中電灯）・長靴を用意すれば、10人単位で案内してもらえとのこと。風穴のすばらしさを体感できる日が、今から待ち遠しく感じられます。

お問い合わせ

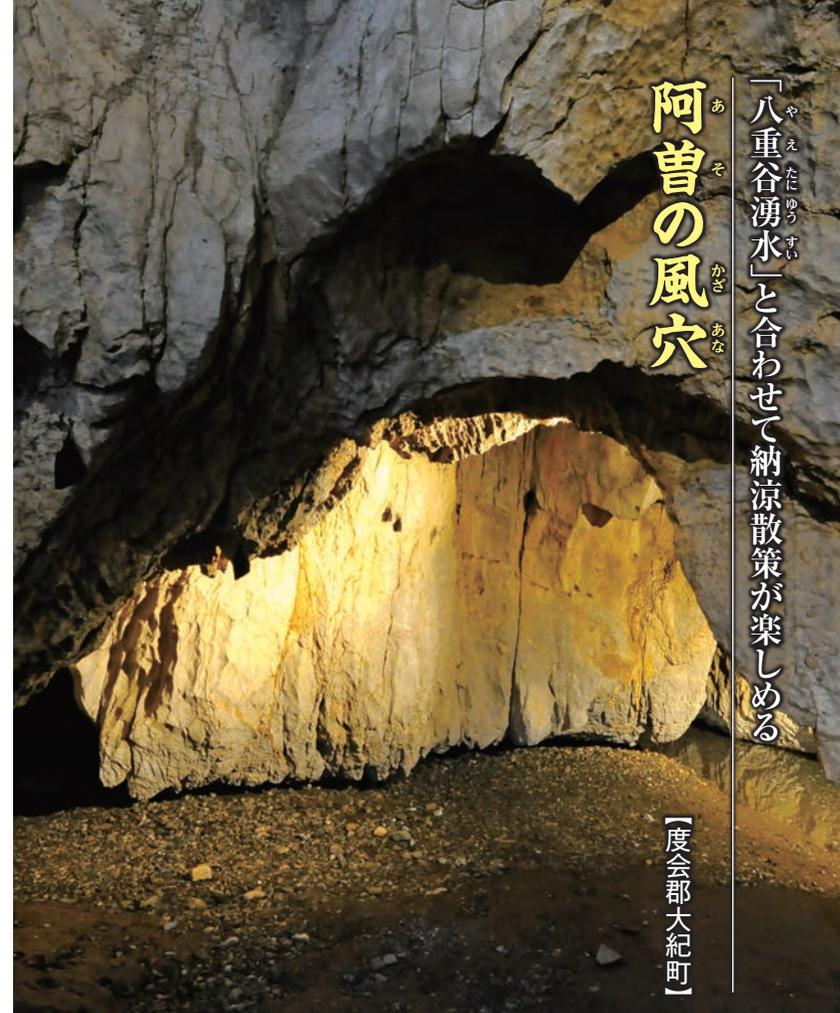
いなべ市教育委員会生涯学習課
TEL 0594-8617846

※印の写真は取材先から提供していただきました

「八重谷湧水」と合わせて納涼散策が楽しめる

阿曾の風穴

【度会郡大紀町】



「阿曾の風穴」内部

大紀町内を南西から北東に流れる大内山川には、例年アユやアマゴを求めて大勢の太公望が集まります。この大内山川の支流の一つ、奥河内川上流には、「阿曾の風穴」と「八重谷湧水」と称され

る名所があり、夏期には涼を求める人々で賑わいます。「風穴は、子どものころの遊び場でした」と懐かしそうに語るのは、大紀町役場商工観光課で課長を務める鳥田正彦

さん。この日は、奥河内川に並行して続く「林道奥西河内線」を東へと車を走らせ、「阿曾の風穴」まで道案内していただきました。林道脇にぽっかりと空いた小さな入口から、一人ずつ梯子を降りた後は、少し細くなった場所を進みます。すると、目の前に想像以上の空間が広がりました。高さは5メートル以上、奥行きも数メートル以上はありそうです。人感知センサーで点灯したライトに照らし出された岩の複雑な形状を眺めていると、花の蕾のような形をした黒い物に気付きました。小型のコウモリで、目が慣れてくると、100匹以上が睡眠中。触れないように気を付けながら、奥へと進みます。すると、地面が水に浸かり、池のようになっていました。その深さは15センチメートル程度ですが、さらに奥の方は水没しているため、これ以上進むのは無理とのことでした。足元の水の透明度は高く、泳いでいる小魚が宙を浮遊している様に見えます。また、

どこからか、トクン・ポコン・ポコンと、水の音も聞こえてきます。洞窟内に反響して、水琴窟のような音色でした。

訪問者や地域の人々が、天然の冷蔵庫と呼ぶ意味が実感できる風穴を出た後は、すぐ近くの「八重谷湧水」へと向かいます。すると、案内板が設置されている入口近くに、湧水の水汲み場がありました。昨年の専門機関による水質検査の結果では、pH値は8.0で、味・臭気ともに異常はないとのこと。ただし、飲料水として持ち帰った場合は、煮沸

をおすすめしますということですが。少したけ口に含んでみると、さっぱりと飲みやすく感じました。

入口から湧水地までの約160メートルの間は遊歩道が整備され、せせらぎを聞きながらの散策が楽しめます。途中には、八重滝と呼ばれる二筋の流れがあり、エメラルドグリーンの滝つぼに落ちる様子は一幅の画のようです。八重滝から少し歩くと、湧水地に到着。苔むした岩の間から透き通った水が湧き出る様子を眺めていると、いつしか

気分が落ち着くのを感じます。暑い時期はもちろんのこと、新緑のころから紅葉のころまで、快適な散策が満喫できることでしょう。また、周囲には廃校を利用した「阿曾湯の里」や、内宮の別宮・瀧原宮、モミジで有名な網掛山、シダレ桜が美しい龍祥寺などの名所旧跡が多くあります。合わせて訪ねれば、心身ともに癒されること、間違いなしです。

お問い合わせ

大紀町商工観光課
TEL 0598-861-2243



風穴の奥は地下水に浸かっている



水汲み場



八重滝



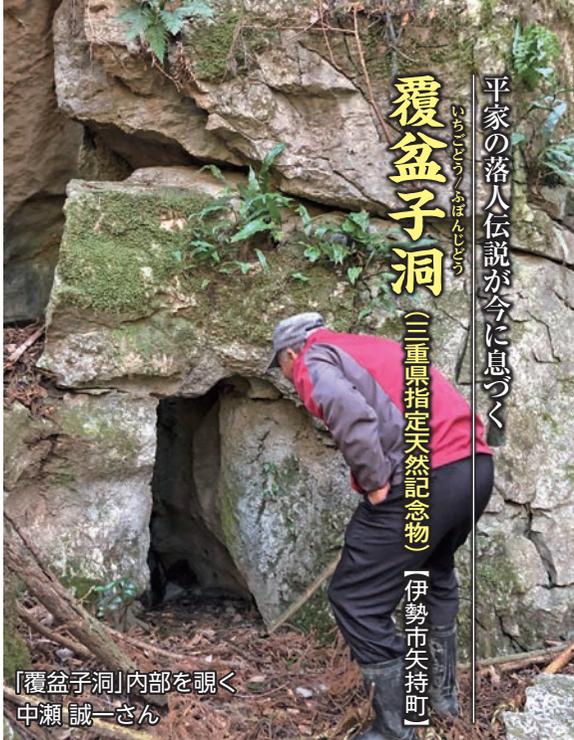
湧水地

平家の落人伝説が今に息づく

覆盆子洞

〔三重県指定天然記念物〕

〔伊勢市矢持町〕



「覆盆子洞」内部を覗く
中瀬 誠一さん

「知盛は、源氏の奇手来襲にそなえて
婦女子を覆盆子洞へ潜めたと伝えられ
る。そして、知盛は平氏再興を期して、
その拠点とすべく、近くに久昌寺を発
願したと伝説は続いていく…」

右の文章は『伊勢の里山沼木一宇郷
の民話と歴史』の一節。文中の知盛とは、
平清盛の4男、平知盛のこと。歴史上
では「壇ノ浦の戦い」で海へ飛び込んだ
とされますが、伊勢市南部の「宇郷」と
呼ばれる一帯には、右のような伝説が受

け継がれているのです。

「伝説の真偽はとも
かく、覆盆子洞は実在
しますよ」と教えてく
れるのは、中瀬誠一さ
ん。「平家の里語り部」
として、地域に残る落
人伝説を語り継ぐ中瀬
さんの案内で、久昌寺
脇から続く道を車で進
みます。すると「覆盆
子洞伝説」と記された



「覆盆子洞伝説」案内板

んのサポー
トとロープ
を頼りに岩
の隙間を進
むのも一苦
労で、この
日は数メートル進んだところで断念。一
般的には外側から覗き見る程度にした
方がよいでしょう。



「覆盆子洞」内部

案内板などによれば、この洞窟は、お
よそ200万年前の地層中に存在する
レンズ状の石灰岩層を地下水が溶かす
ことよって形成されました。変化に
富んだ内部では、『三重県レッドデー
タブック2015』で準絶滅危惧種に分類
されているコキクガシラコウモリなど
が確認されています。

かつて、婦女子をかくまったとされる
洞窟は、貴重な生物を守るため、今も孤
軍奮闘しているのかもしれない。

お問い合わせ

TEL 090-9023-1121

(中瀬 誠一さん)

洞門から昇る神秘的な朝日を眺める

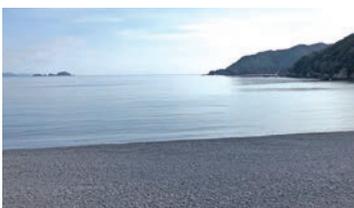
島勝の海食洞門「天満洞」

〔三重県指定天然記念物〕

〔北牟婁郡紀北町〕



朝日に染まる「天満洞」は
春分、秋分の日が狙い目



船越海岸

い部分が徐々に削られ、穴が開
いたと考えられています。周辺
の海岸にも海食洞は見られるよ
うですが、「天満洞」は直径が約
20メートル、奥行き約30メー
トルに達し、県下でも規模が大き
いことで知られています。

念物に指
定されま
した。砂
岩や粘板
岩などが
層になり、
浸食に弱

ンがやってきます。「天満洞まで陸から
は行けません」が、県道沿いの「中熊小公
園」が展望スポットです。東方面の海に
は海水浴場、和具の浜も見えています。
北側の山を越えると熊野灘臨海公園の
大白地区があり、正月には初日の出を
見る人もいます。沖に浮かぶのは、国
指定の天然記念物「天島」ですと、周囲
の魅力を語る紀北町観光協会の西尾寛
明さん。

「天島」は無人島。貴重な暖地性植物
がさまざまに生育し、原始に近い状態
で保存されています。この島は江戸川
乱歩の少年探偵シリーズの『大金塊』に
「岩屋島」として登場しますが、長島沖
に停泊した汽船の中でヒントを得た作
品だそうです。

大自然が時間をかけて生み出した海
辺の風景に、昔も今も多くの人が魅了
されています。

お問い合わせ

紀北町観光協会

TEL 0597-46-3555

この時期には洞門
から朝日が昇ると
あって、太陽が洞
門に収まる幻想的
なシャッターチャ
ンスを狙って、た
くさんのカメラマ



「中熊小公園」

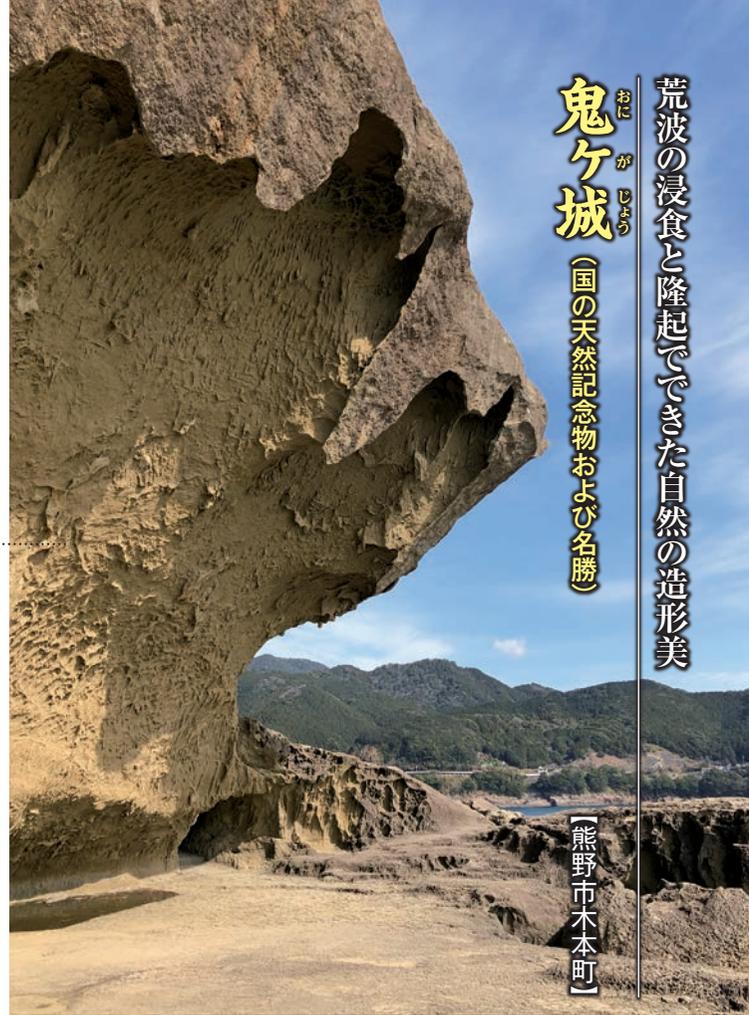
紀北町の矢口湾に沿って奥まった集
落を走り、島勝浦トンネルを抜けると、
左に見える船越海岸。注意深く、海に
突き出た岬を眺めると、ある角度
でぽっかり開いた穴が見えます。これ
は黒潮の荒波によって浸食された洞穴
「天満洞」。岩壁がトンネル状に貫通し
ています。「島勝の海食洞門」として、
昭和53(1978)年2月に県の天然記

※印の写真は取材先から提供していただきました

荒波の浸食と隆起でできた自然の造形美

鬼ヶ城おにがじょう （国の天然記念物および名勝）

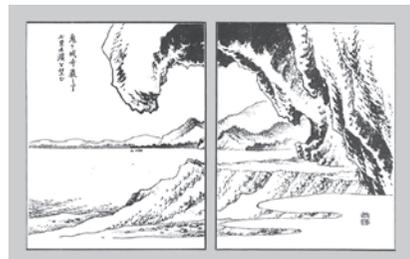
熊野市木本町



熊野灘に沿って変化に富んだ奇岩が続く「鬼ヶ城」は、国の天然記念物。東口から西口までの1.2キロに、大小無数の海蝕洞が並んでいます。荒波や風による浸食、そして幾度かの地殻変動によって造られた地形は見応えがあり、それぞれの洞窟や奇岩、絶壁には、「千畳敷」

や「奥の木戸」、「猿戻り」など特徴のある呼び名が付けられています。「ここは昔からの景勝地であり、観光地。江戸時代後期の『紀伊国名所図会』にも登場し、昭和2（1927）年、日本を代表する景勝地『日本百景』にも選ばれました。『紀伊山地の霊場と参詣道』の一部とし

足がすくむほどの迫力



『紀伊国名所図会』にも描かれる

て、ユネスコの世界遺産に登録されています。「熊野市観光公社」代表取締役の小川貴弘さん。

遊歩道を

進むと「千畳敷」への入口が見えてきます。岩場に開いた穴をくぐった先の空間に、思わず絶句。ここは石英粗面岩が海蝕されてできた大洞窟。広さは約1500平方メートルあり、高さは15メートルほど。周りの突き出た岩の先端が、地殻変動の動きを物語っています。海蝕洞は岩盤の割れ目や断層などの弱い部分に、波がぶつかることでつくられる窪み。長い歳月を経て、それが深く大きくなり、荒々しい海上の舞台となって現れました。

V字形をした「奥の木戸」から岩間を

抜けると、爽快かつ雄大な海景色が広がっています。この先にある「猿戻り」と「犬戻り」は、垂直に近い断崖。大きく縦に走る岩の裂け目に、猿や犬も足がすくんだことでしょう。そんな断崖絶壁に造られた遊歩道からはるか下では、波飛沫が打ち寄せ、大自然の壮さを肌で感じることができます。

流木が岩の下に食い込む「木喰岩」は、約300トンの大岩。「飛渡り」は、岩の深い割れ目の下から怒涛の水音が聞こえます。かつてはこの隙間を飛んで渡っていたのでしょうか。いまは小さな橋がいくつか架けられ、遊歩道をつ

くった苦勞が偲ばれます。洞窟の天井にある無数の窪みは「蜂の巣」、岩盤から突き出した岩を「波切不動」と呼ぶなど、自然の造形はまさに岩のアート。さらに進むと七里御浜と熊野の町並みが見えてきます。遊歩道は片道約40分の道のりですが、台風や高波では一部通行止めになることも。その荒々しさを象徴するような、人々を圧倒する自然美が存在しています。

退治にやってきたのが征夷大將軍・坂上田村麻呂です。征伐を手助けしたという天女伝説も残され、遊歩道にも、鬼が水を汲んだと伝えられる「水谷」や、平らな岩場は「鬼の洗濯場」と、鬼伝説が息づいています。また、室町時代にはこの地の領主であった有馬和泉守忠親により、山頂に城が築かれました。城郭が十数か所あり、この地方最大規模の山城だったようです。東口から城跡までは、桜咲き誇るハイキングコースが整備され、そこから熊野古道松本峠に向かう道には堀切跡も残されています。

自然が造り出した神秘的な景観と美しい海、そして城跡からも垣間見える、地域の歴史。鬼ヶ城の魅力を歩いて体感してみましよう。

お問い合わせ

熊野市観光公社
TEL 05997-89-2229
鬼ヶ城センター
TEL 05997-89-1502



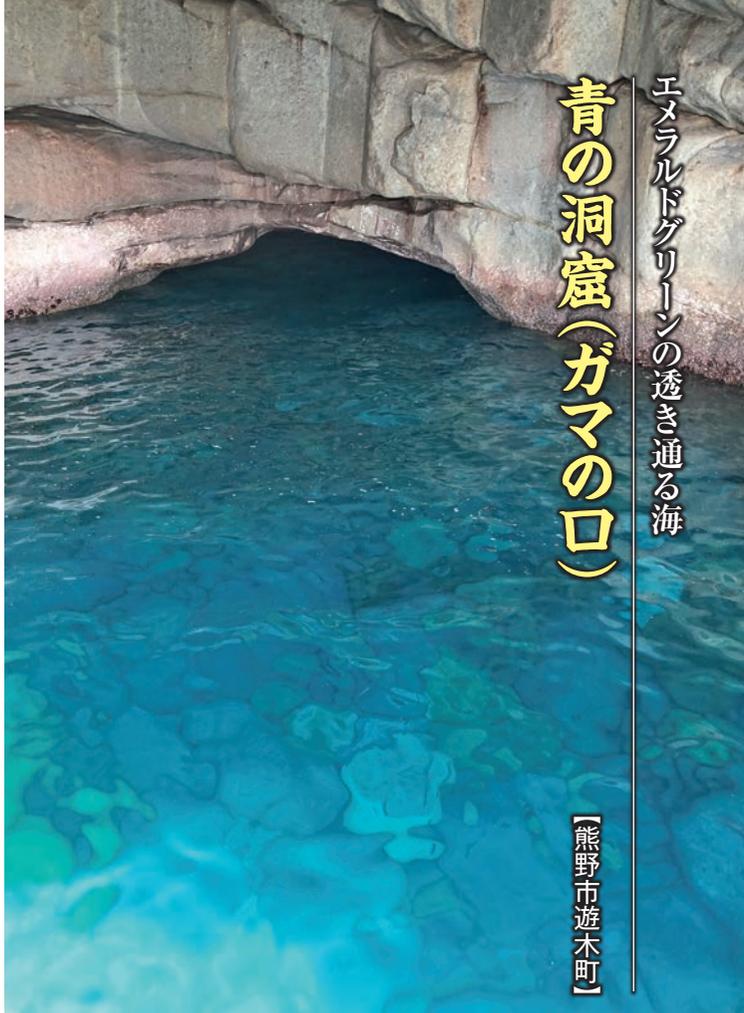
広々とした「千畳敷」



東口から西口をつなぐ遊歩道

青の洞窟(ガマの口)

【熊野市遊木町】



「青の洞窟」は透明度抜群の海

熊野版「青の洞窟」と評判のスポットは、海岸沿いの洞窟「ガマの口」。天候などの条件がよければ、海面が真っ青に輝いて見えるとあって、イタリア南部のカプリ島にある観光名所に因んで名付けられました。アクセスに陸路はなく、海路でしか近づくことはできません。

熊野市観光公社が企画する「樫ヶ崎観光遊覧船」を利用することにしました。遊覧船の所要時間は約70分。「ガマの口」ほか、高さ約100メートルのスケールでそびえる柱状節理の「樫ヶ崎」、鋭く切り立つ断崖の「海金剛」など、熊野の雄大な海の自然をまわる見学コース

です。

「遊覧船は12年前から運行していますが、ここ数年で随分と人気が出ました。熊野市には熊野古道をはじめ丸山千枚田などの見所もありますが、海沿いに展開する風景もこの地域の特徴がよく表れています。美しい熊野灘、柱状節理、そして巨岩・奇岩の数々、すばらしい眺めを堪能できるクルージングです。夏場の利用も多いですが、北から風の吹く秋から冬は海が安定しています」と熊野市観光公社の代表取締役・小川貴弘さん。「鬼ヶ城」の近くにある松崎港から出航します。

突き出した岬に広がる「鬼ヶ城」を海から見れば、荒波に削られた海蝕洞の地形の特異さが一目瞭然です。また、ならかに弧を描く七里御浜と複雑に入り組むリアス海岸を同時に眺めるのも、この場所ならではの。海の様相がきつぱりと分かれています。ここで大きく旋回し、北東方面の海岸線へ。磯崎やサシマ漁で知られる遊木など、海辺の集

落は漁業が盛ん。渡船で磯へ渡って釣りを楽しむ人の多さにも驚きます。典型的な柱状節理の景色が続く中、「徐福の宮」がある波田須方面へ航路を取ると、海際にJRの線路が見えました。周囲の山中には熊野古道のルートがあります。「直線的なので、どうしても急勾配で険しい道ですが、苔むした石畳が通じています」と、小川さん。波田須の先、奥まった入江には、水質のきれいな新鹿海水浴場。背後の山の緑と白い砂浜、遠浅の青い海がコントラストを描いています。

しばらく進むと、岩場にカエルが口



クルーズは30人乗りの小型船舶



ぽっかり口を開ける「ガマの口」



堂々たる柱状節理の「樫ヶ崎」



圧倒される断崖絶壁の「海金剛」

を開けたような大きな穴が見えてきます。これが「青の洞窟」です。地元で「ガマの口」と呼ばれ、その洞窟の奥へと船首を近付けてくれます。天候や海の条件がよければ、透き通るエメラルドグリーンの海面を楽しむことができます。さらに北上すると、圧巻の柱状節理「樫ヶ崎」が見えてきます。国道から歩いて訪ねることもできますが、海上からは、いくつもの柱が連なったように見える大絶壁を一望。柱状節理はマグマが地表を流れて冷却固結する際、収縮して生じる岩体にできた規則性のある割れ目で、それが柱のように見えて

います。長い年月をかけてつくられた自然の芸術作品です。

「樫ヶ崎」の裏側に回ってみると、そこは「海金剛」と呼ばれる断崖で、秘境のような雰囲気があります。船は崖の真下へと近付き、そこから見上げると、目の覚めるような絶景。乗船客の歓声が、切り立つ岩場に響きます。

遊覧船の旅は、船長のもてなしの心でサービスマン満点。熊野ならではの、ダイナミックな海景色を堪能できます。

お問い合わせ

熊野市観光公社
TEL 0597-89-2229

かめやま万葉の森

東海道の宿場町がある亀山では、人の往来盛んななか、文学が育まれてきました。能（やぶらぎのうた）の煩野で望郷歌を残したとされる倭建命や鈴鹿山を詠んだ西行法師、室町時代に「正法（しょうぼう）寺山荘」に招かれた連歌師・柴屋軒宗長など、和歌の文化が花開きました。「かめやま万葉の森」では、これらを活かして、まちづくりや子どもの健全育成に取り組んでいます。



伊藤 宣之さん

お問い合わせ
「かめやま万葉の森」
亀山市椿世町152番地
TEL0595-82-0796
(代表 伊藤 宣之さん)

「かめやま万葉の森」とは、亀山市の歴史的文化的価値のあるスポットをまとめた呼び名であり、活動するグループ名。代表の伊藤 宣之さんは、和歌や歴史を活用しながら、まちづくりや環境保全、子どもの健全育成に取り組んできました。「佐佐木信綱顕彰会」にも所属し、文学の発展に貢献している伊藤さんにお話を伺いました。

——伊藤さんは和歌に造詣が深く、「佐佐木信綱顕彰会」の理事も兼ねていらっしゃるのですか。

伊藤：亀山周辺で詠まれた和歌は無数にあり、「万葉集」や「新古今和歌集」などにも鈴鹿川や鈴鹿山が登場します。そ

れほど歴史が古く、文化が生まれた場所なのでしょう。今でも、鈴鹿の山並み、関宿のまち、そして亀山城城跡など、人々を魅了する景色があります。明治時代には、短歌結社の「竹柏園（たけくわん）」ができ、歌人であり国文学者の佐佐木 信綱の父・弘綱の指導のもと、作歌活動が盛んでした。和歌は短い言葉で日常の機微から季節の移ろい、将来の夢までを表現できます。子どもから大人まで幅広い世代に親しむ機会を提供するため、平成元（1989）年を亀山文化元年と位置付け、市民有志と「かめやま万葉の森」を設立しました。地域の和歌や歴史を活用しながら、本物の文化のまちづくりを推進しています。

——点在する文化的価値のある史跡や風景を「かめやま万葉の森」がつなぎ、「十二の道」を活動拠点にしているのですか。

伊藤：健康維持のために歩く道として整備し、これまでに多くの人に歩いていただきました。別名「まほろばの道」とも呼んでいます。まほろばとは「素晴らしい場所」といった意味を持つ日本の古語です。そういった言葉や和歌の修辞である枕詞なども、未来に伝えていく価値のあるものです。

ある森にしていることと「日本一小さい文化祭」をテーマとし、地元小学校の児童にも来てもらっています。児童が森の活動で感じたことを「こころの花」としてまとめ、発表しました。亀山市の個性を子どもの健全育成に役立てたいと考えています。

——亀山市の個性にはどういったものがありますか。

伊藤：亀山は城下町ですが、城地は丘陵地を切り開いて整備し、谷筋を埋め立てて堀を造りました。安藤 広重の「東海道五十三次」に描かれた亀山宿の「雪晴」は、まちの特徴を象徴的に表してい

ると思います。

また、関宿の西の入口にあたる西追分に松の木を植えたこともあります。ここは東海道と大和街道の分岐点。坂下宿や鈴鹿峠を越えていく古の旅人は、西追分から峠を見上げ、この先の道の険しさに想いを馳せ、一息ついたことでしょうか。鈴鹿山や鈴鹿嶺は、和歌によく出てきますが、過去の文献を調べて、地域に関する事柄を残しています。

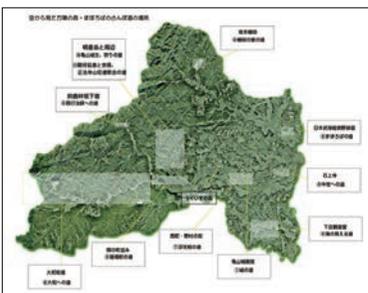
——子どもたちに和歌を発表する場を提供したりと、継承の活動も積極的です。

和歌を教えたりしますし、児童がつくった和歌を教育委員会を通して展示会をすることもあります。

地域の小学校に『万葉集』に詠まれている花木を植えていきたいという想いがあります。「かめやま万葉の森」で学び合って自然から知識を得てもらったり、文学に親しむ環境をつくっていくのが、活動のめざすところです。

——和歌を通して文学の振興と充実を図り、それを未来へ継承することで、魅力ある亀山のまちの発信にもつながっています。

インタビュー…中村 元美



「かめやま万葉の森」と「十二の道」の図※



「かめやま万葉の森」の「うぐいすの森」



「東海道五十三次」に描かれた亀山宿の「雪晴」のことも紹介している案内板



関宿の西追分に茂る松の木

※印の写真は取材先から提供していただきました



長野氏の夢の跡と伊賀街道・長野宿

津市美里町

かい わい

北長野界限

長野氏は、南北朝時代から室町時代にかけて、現在の津市の北側一帯を治めていた武士です。一族は各地に城を構え、本拠地は美里町にありました。町内の桂畑地区と北長野地区には城跡が残り、これらを「長野氏城跡(国指定史跡)」と総称しています。

時代は下り、江戸時代に入ると、津藩の藩主となった藤堂高虎は、津城下と上野城下を結ぶ伊賀街道を整備しました。この街道で難所とされたのが、津市と伊賀市の間立ちにはだかる長野峠の麓に位置する長野宿では、上野方面から峠を越えてきた旅人たちが、その疲れを癒したことでしょう。

今回は「長野氏城跡」の中で北長野地区にたつむ「西の城跡」「中の城跡」「東の城跡」と、伊賀街道の長野宿をめぐるります。

取材・文：中村真由美

「美里ふるさと資料館」

今回の散策の基点となるのは「美里ふるさと資料館」です。車で来館の場合は、伊勢自動車道「津」ICから20分程度、公共交通機関を利用する場合は、近鉄「津新町」駅前から三重交通バスに乗り、バス停「長野」から徒歩約5分の距離です。「まずは、美里町のことを予習してくださいませ」と、館内に案内されると、町の歴史が時系列で紹介されているほか、文化財・民具なども展示されています。



「美里ふるさと資料館」展示風景



智永寺
側は北畠氏、
北側は伊勢守

室町時代に
なると、かつ
ての伊勢国は
雲出川付近を
境として、南
築いていきま
した。

した。展示資料や説明によると、長野氏は鎌倉時代に伊豆を本拠地とした工藤氏の一族ともいわれ、町との関わりは鎌倉時代後期にまで遡ります。少なくとも南北朝時代には桂畑地区の標高約520メートルの山頂に城を築き、本拠地としていたようです。同時代の軍記物語『太平記』には、この城が要害堅固なため、寄せ手がなかなか近寄れなかったことが記されています。その後、勢力が拡大するにつれて、北長野地区の3つに連なる丘陵の頂上(標高約200



長野城跡



今回の案内人は「美里ボランティアガイド会」会長の山本 茂樹さんと伊藤 キヤ子さん。山本さんの博識と、伊藤さんの健脚には驚かされました

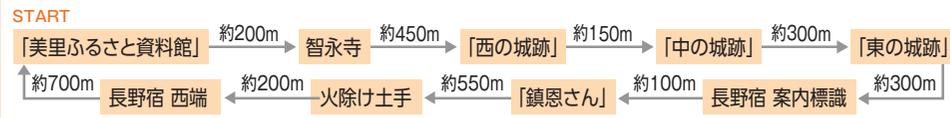


護の支配下にありました。とはいえ、幕府から任命された守護の力は弱く、実際には長野氏や関氏などの国人領主がそれぞれの地域を支配し、均衡を保っていました。なお国人とは、在地性の強い領主層のことで、国衆とも呼ばれます。「では、城跡へ向かいますが、途中には智永寺があります」との話で、同館を後にします。住宅地を歩くと右手に見えてきたのが、お話の智永寺です。開山は、寛正元(1460)年。長野家10代当主の政藤の妹が開いたと伝わる人が祈願に訪れ、ミカン・菓子・餅などを撒く風習が続いています。

長野氏の夢の跡をたどる

智永寺に別れを告げて東へ進むと、山中へと入る細い道が現れました。ここからは、すべりやすい場所や倒木などに気を付けながら進みます。すると、15分程度でササが生い茂る「西の城跡」頂上に到着。この「西の城跡」頂上からは、

■ 行程図 所要時間／約3時間 ※所要時間は、おおよその目安です。





「西の城跡」頂上



「長野城跡」遠望



「中の城跡」頂上



「東の城跡」頂上周辺

尾根伝いに東へ数分行くと、少し展望が開けた場所が出現しました。「ここは見張り台で、向こうに見えるのが『長野城跡』です」と指し示す方に目を向けると、鉄塔が建つ山が望めました。「昔は、ここから狼煙をあげて合図をしたのかもしれないですね」と話す伊藤さんからは、長野氏を誇らしく思う気持ちが伝わります。

約3.5キロメートル先にたたく「長野城跡」を想像した後は、約5分で「中の城跡」へ。頂上は想像以上に広く、中世の山城特有の土塁跡などが確認できました。この「中の城跡」から最後の「東の

城跡」までは約30分。少し長い距離ですが、苔むした丸太橋などは幻想的で、気分よく歩きました。

今回の城跡めぐりは、西から始めましたが、実際に築かれた順番は東が最初だったようです。いずれにしても、各城跡は、その後の長野氏の盛衰を見届けることとなりました。室町時代に一応は安定していた伊勢国の勢力分布は、応仁元(1467)年に「応仁の乱」が起きたことで崩れ始め、国人領主たちの勢力争いが激しくなったのです。長野氏も一時は桑名まで進出したものの、撤退を余儀なくされ、永禄元(15

58)年に北畠氏に服属することに。さらに約10年後の織田信長の伊勢侵攻によって滅亡という運命をたどるのです。『城山』と呼ばれる「東の城跡」では、ヤブツバキの赤い花が、心なしか悲しげに見えました。

長野宿と火除け土手

「東の城跡」を後にして山道を下ると、突然視界が開け、国道163号線に合流しました。すると「これより長野宿」の案内標識が目にとまりました。

「ここから西へ歩けば長野宿へと入りますが、その前に寄り道して昔の処刑

場跡に行き、『鎮恩さん』を見ておきましょう」と案内されて、少し南に向かいます。「鎮恩さん」とは、処刑された罪人の霊を供養するために地域住民が建てた小さな祠で、今も5月には供養祭が営まれていると伺いました。



「鎮恩さん」

「鎮恩さん」に手を合わせた後は、長野宿へ。藤堂高虎によって官道として整備された伊賀街道は、全長約12里(50

キロ)の道程です。地域の人々は、宿場町として賑わった通りを今も「マチ」と呼んでいるといいます。お話を聞きながら、町の中央あたりまで進むと、大きな説明板が見えてきました。「江戸時代末期から明治初期の様子を復元した図ですが、紺屋・伊勢屋・油屋などの屋号が今も残っています」と教わります。すると、火除け土手という文字が目にとまりました。火除け土手とは、文字通り火事を防ぐために築かれた土手のこと。同宿は、度々火事に見舞われましたが、中でも正徳4(1714)年の大火事で大半を失ったことから築かれた

といえます。その規模は、高さ約4メートル、幅は約16メートル。長さは道を挟んで北側が約24メートル、南側は約17メートルもあり、周囲は石垣で囲んでありました。この土手を挟んだ反対側に問屋と庄屋を配置することで、もし火事が発生しても、両方が同時に焼失するのを避けたのです。残念ながら、現在は北側の石垣の一部を残すのみとなりましたが、当時の人々の切実な想いが伝わります。

長野氏の夢の跡と長野宿をめぐる散策は、火除け土手からさらに西へと進み、家並みが途切れたあたりで終了です。終点となる「美里ふるさと資料館」へは歩いて10分程度の距離。バスを利用の場合は、再びバス停「長野」から三重交通バスに乗るのが便利ですが、本数が少ないため、事前に時刻表を確認しておくとういでしょう。

問「美里ふるさと資料館」

「美里ふるさと資料館」月曜日休館
TEL 059-279-3501



長野宿の家並み



火除け土手の石垣

三重 の シンボル

志摩市

三重県内の市町などが、それぞれの特徴を象徴する存在として選定している木・花を紹介します。



市の木
ネムノキ



市の花
ハマユウ

■ お問い合わせ ■

志摩市 政策推進部 総合政策課 TEL 0599-44-0205

*市・町名の50音順に紹介しています。

*シンボルを選定していない、もしくは鳥や魚などを選定している市町も一部あります。

表紙写真 阿曾の風穴(度会郡大紀町)

百五銀行 丸之内本部棟内の「歴史資料館」で、「すばらしき“みえ”」のバックナンバーをご覧ください。
☎ 経営企画部広報ESG課 TEL 059-223-2326(要予約)